

## 『後醍醐天皇像』を用いた授業実践例

私立海城高等学校 横井成行

神奈川県藤沢市にある清浄光寺(時宗の総本山で「遊行寺」として知られる)に伝えられてきた、重要文化財「絹本着色 後醍醐天皇像」は、後醍醐天皇(1288～1339)の死後、35日の法要の際に天皇の腹心(護持僧)だった僧文観(1278～1357)の手によって「開眼」されたといわれる。しかも、近年の研究によれば、清浄光寺の中で16世紀初めに作成された模本「紙本着色 後醍醐天皇像」が発見され、この模本の画像自体にも御簾をかけていた跡が見つかり、実際の法会の際には後醍醐天皇像そのものを礼拝の対象としてきたことがはっきりしてきている。つまり、原本を直接使うのではなく模本を用いても長く法会が営まれたことがわかるのである。

ひるがえって、原本自体は、文観が天皇に対する追悼の念を込めて作成したと考えられ、肖像画ではあるが普通の肖像画とは異なるいくつかの特徴をもつといわれる。この像は文観→醍醐寺座主深勝法親王→同座主<sup>こうそん</sup>杲尊法親王→僧尊観(杲尊の「いとこ」で亀山天皇の孫)に伝えられた。そして尊観が第12代遊行上人となったことを契機にして清浄光寺に伝わり、それ以後、清浄光寺はこの像を大切に伝来してきたと考えられている。

まずは、こうした画像の成立・伝来の背景や近年の研究成果を生徒に語りかけて、その背景を十分に理解してもらうことを心がけたい。「画像を読む」ときには、読み解きの「手がかり」を生徒とともに共有しておくことが大切である。

そこで、あらためてこの「絹本着色 後醍醐天皇像」を見てみよう。多くの研究者が指摘する共通点は次の諸点である。

- ①画面の中央に描かれた後醍醐天皇の姿は「八葉蓮華」の敷物の上におかれた畳の上に右を向いた形で座っている形で描かれている。
- ②頭の上には赤い玉＝「日輪」をいただく「冕冠<sup>べんかん</sup>十二旋(礼冠)」とよばれるかぶり物(かんむり)

とそれにたれ下がるいく筋もの宝玉をつけているが、これは、衣服の左右の肩に日月、衣服そのものや袖などに雲竜が描かれていることから、中国唐代の皇帝になぞらえられて、天子であることを強調している。

- ③右手には、「五鈷杵<sup>ごこしよ</sup>」とよぶ密教用具を持つ。
- ④左手には、「五鈷鈴<sup>ごこれい</sup>」とよぶ密教用具を持つ。
- ⑤上記③④から、この天皇像は、人間・後醍醐をそのまま描いたというよりは、密教の「金剛薩埵<sup>こんごうさつた</sup>」という菩薩(悟りを開いた存在)であることが強調されている。
- ⑥さらに、天皇像の上に貼られた紙に「天照皇大神」(伊勢神宮＝皇祖の正統)、「八幡大菩薩」(石清水八幡宮＝武家の祖神)、「春日大明神」(春日大社＝公家の祖神)という神々の名前が墨書きされていることから、天皇像がこれら三社の託宣の結果である、すなわち、神祇(天のカミ・地のカミ)としての後醍醐天皇が強調されている。また、後醍醐天皇が座っている畳の前には狛犬や獅子が描かれており、天皇を神として扱っている。
- ⑦後醍醐天皇には、このほかに2点の肖像画がある。1点は「天子撰関御影」に収められている。ほかの天皇に比べ、豊かな鬚が特徴的である。生前に描かれた肖像(寿像)といわれる。もう1点は、京都大徳寺蔵のもの。清涼殿(天皇の常の御所)で、政をしている姿である。これは、「聖徳太子勝鬘経講讃図」を下敷きにしている。生徒には、以上の諸点にも触れた話をしたほうがよいであろう。それを前提にしたうえで、次のように問いかけて、生徒たちの自発的な興味・関心をもとに、授業を展開していきたい。

「これまでの研究では、①～⑦のことが指摘されているのだが、どうだろうか、諸君自身が気づくことはないだろうか」

A君「先生の話をもとにすると、腹心の文観が、



▲「天子摂関御影」のうち「天子巻」より「後醍醐院」  
(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)

自分を信頼してくれた後醍醐天皇の死をいかに悲しみ、また心を込めて弔おうとしたかがよくわかりますが、その分、實在の後醍醐天皇以上に『神や仏』のように扱おうとしたと考えられます。

「そうだ。『太平記』などでは、後醍醐天皇は最期に「玉骨はたとえ南山の苔に埋むるとも、魂魄はつねに北關の天を望まん」（たとえ自分は吉野の山の中で死んだとしても、魂はつねに京都の政権をとることを望んでいる）と言い残して亡くなったといわれているよね。文飾もあるかもしれないけれど、すさまじいまでの権力への意思を感じる言葉だよ。自分の志を果たそうとする強い意志をもちながら天皇が亡くなったことを示すエピソードだ。そば近くに仕えた文観はこうした天皇の意思を代弁し、後醍醐天皇のあとに続く南朝という政治勢力の精神的なよりどころをつくろうとしたのではないだろうか。実際、この像は、本来浄土門である清浄光寺のなかでも神格化されて礼拝されたのだから。

Bさん『「天子である』』ということが強調されていますが、と同時に、先生が言われた『三社』が貼紙で示されていることを考えると、天皇の位置づけが公家と武家が合わさったところに成立するということが考えられます」。

「いいところに気がついたね。後醍醐天皇の政治の理想は、公武の一体化された新政権の上に天皇が君臨することだったね。有名な『二条河原落書』（『建武年間記』に収録）で痛烈に批判はされているけれど。それは、『宋学』といって、当時の中国（南宋）での専制権力者である皇帝の統治を、文臣優位のもとで武臣も支えるという構造を政治のモデルとする考え方ともつながっていたんだ」。

Cさん「先生、天皇が畳の上に座っている姿かたち自体、ほかの時代ですが、教科書にのっている豊臣秀吉の像などともよく似ていると私は思うんですが、何か関係があるのでしょうか」。

「そうだね。研究者の中には、Cさんが言うように、高貴な人物や権力者の肖像とこの肖像との共通性を指摘する人も多いんだよ。⑦で指摘した

▲後醍醐天皇（大徳寺蔵）

ように、例えば、『勝鬘經』というお経を説く聖徳太子の像がやはり冠をかぶったうえに『冕冠』をかぶり、袈裟をまとう姿かたちをとる点がこの後醍醐天皇像と共通している。これを一つのモデルとしてこの後醍醐天皇像も描かれた可能性を指摘する人もいる。つまり、俗世の統治権をもつ王権や仏教や神の世界を超越した存在として信仰された聖徳太子と、後醍醐天皇のイメージを重ねて描いたのではないかというんだね。そういえば、後醍醐天皇は四天王寺に蔵されてきた聖徳太子が書いたという『四天王寺御手印縁起』を借り出して書写し、自分の手印を押して返却したというから、太子に対して信仰に近い感情をもっていただろうね。後醍醐天皇自身も、自らを太子の生まれ変わり(化現)であると信じていたようなんだよ。一方で、後醍醐天皇は父の後宇多天皇から引きついでといわれる、『密教世界の王』をめざしていたといわれる。だから、空海(弘法大師)の縁日には東寺をはじめとする空海ゆかりの寺院の宝物を宮中に召し出すかわりに財物をその寺に与えたりしている。つまり、さっきのA君の質問とも関連するが、世俗の『王法』と聖なる世界の『仏法』の一体化をめざしたんだろうね。ところで、豊臣秀吉はおろか、歴代の天皇や江戸幕府の将軍たちの肖像もざっと一覧してみると、こうした畳の上に座って、御簾を引き上げることでその顔や表情が見えるように設定されている作品が多いことは事実だ。貴人・権力者を権威あるもの、あおぎ見る存在として描くときの一種のテンプレートになっていたのかもしれないね。ただ、研究はまだこれからだ。ここで紹介したいいくつかの説も、研究者のひとたちがいろいろな証拠をもとに立てた仮説にすぎない。一つ一つに異論もあるんだ。歴史学は何か決まりきったことを覚えて事終われりとする科目ではない。はっきり言えば、さまざまな証拠や素材をもとにして解釈しさまざまな像を組み立てる営みだ。だから君たちも、自分の説を立てられるんだよ。そのためにも、できるだけ幅広く興味をもっていろいろなことを学び吸収して、自分なりの糧を蓄えておくことが大切だね。



▲聖徳太子勝鬘經講讀図  
(少林寺蔵、画像提供:滋賀県立琵琶湖文化館)

【参考文献】

- 武田佐知子「聖徳太子像と後醍醐天皇—勝鬘經講讀図の異形性をめぐって—」『大阪外国語大学 アジア学論叢』1(1991)
- 網野善彦『異形の王権』(平凡社, 1993年)
- 佐藤和彦, 樋口州男編『後醍醐天皇のすべて』(新人物往来社, 2004年)
- 黒田日出男『王の身体 王の肖像』(平凡社, 1993年)
- 内田啓一『後醍醐天皇と密教』(法蔵館, 2010年)
- 遠山元浩「清浄光寺蔵「後醍醐天皇像」関連史料の一考察」『駒沢女子大学研究紀要』(駒沢女子大学) 21(2014)
- 神奈川県立金沢文庫『中世密教と〈玉体安穩〉の祈り』(2014年)